

アプカスは、2004年の12月に発生したインド洋大津波のスリランカ人被災者を支援するために結成されました。「対話・自立・持続」をテーマに、そこに暮らす人々の生き方を大切にしながら、災害への緊急復興支援、僻地農村の子ども教育支援、障がい者の支援、環境保全の活動、家庭菜園や持続的な農業技術の普及、衛生向上や水資源の安定確保、現地アーティストとの商品開発等の活動を行っています。

(1) 団体の変遷

- 04年12月 任意団体として発足
- 08年01月 北海道知事よりNPO法人登録認可
- 08年01月 スリランカ現地NGO登録申請
- 09年11月 スリランカ環境NGO登録認可
- 10年08月 社会福祉省よりスリランカNGO登録認可

(2) 組織の構成

日本側組織概要

① 函館事務所

- 常勤職員 1名
- 非常勤職員 4名
- 役員 理事4名 監事1名



〒040-0054 北海道函館市元町20番15号
 代表メール: office@apcas. jpn. org
 ホームページ: http://www. apcas. jpn. org/

スリランカ側組織概要

② コロンボ事務所 (西部州)

- 常勤職員 日本人駐在1名
- 現地常勤職員5名



住所:
 19/8 Highlevel road, Colombo 05, Sri Lanka
 電話>>+94 114361080

③ ワラパネ郡事務所 (中部州)

- 常勤職員 現地常勤職員4名

住所:
 96, Helagama, Madulla, Udupussallawa Walapane,
 Sri Lanka

(3) 関連資料

- 東日本大震災 緊急支援活動
<http://www.apcas.jp/project/1101.html>
- 東日本大震災緊急支援活動をサポート「フィールド基金」
http://www.apcas.jp/data/apcas_field_funds.pdf
- 大震災被災者に物資を送ろう! 「あくしゅプロジェクト」
<http://www.apcas.jp/project/1102.html>
- アプカス石川のインド洋大津波フィールド報告
http://www.apcas.jp/data/asian_tsunami_report.pdf
- 特定非営利活動法人パルシック
<http://www.parcic.org/>

(4) 活動分野および活動実績

- 災害復興支援
 - インド洋大津波被災者支援活動 (05年~09年)
 - 北部・北東部内戦被災者支援活動 (09年~)
 - 中部州地すべり被災者支援 (07年~)
 - スリランカ北中部洪水被災者支援 (11年~)
 - 東日本大震災緊急支援活動 (11年~)
- 僻地農村における教育支援活動
 - 小学校および幼稚園校舎の新築・改修事業 (09年~)
 - 教育機関への上下水道の整備 (09年~)
 - 教育機関への雨水タンク・浄水装置の設置 (09年~)
 - 奨学金の設立および運営 (10年~)
 - 子どもクラブ・英語クラブの運営 (09年~)
 - コンピュータ教室の設立・運営 (09年~)
 - 衛生向上・メンタルケア活動の実施 (08年~)
 - 保護者の教育への理解を深める活動 (08年~)
 - 僻地の教師雇用サポート活動 (10年~)
- 農業技術の向上支援活動
 - 家庭菜園の普及活動 (07年~)
 - 農業研修センターの設立・運営 (09年~)
 - 養鶏、小規模酪農、畜産技術の普及 (09年~)
 - きのこ栽培・養蜂などの生産技術の普及 (10年~)
 - 食品乾燥などの食品加工技術の普及 (10年~)
- 環境保全の活動
 - 農作物残渣を利用した紙作りワークショップ (09年)
 - 廃土を利用した土ブロックによる住宅建設 (09年)
 - おが屑を利用した燃料の生産と普及活動 (09年~)
 - 環境保全絵本の作成と環境教育活動 (09年~)
 - ボルゴダ湖の社会・生態系調査 (10年)
 - バイオガスプラントの設置 (09年~)
 - バイオエタノール及び分散電源の普及実験 (09年)
- 障がい者支援活動
 - 視覚障がい者のフットマッサージ師就職支援 (10年)
 - 視覚障がい者によるマッサージサロンの設立 (11年)
 - ヌワラエリア県における視力検査実施とメガネ配布
- ネットワークの構築活動
 - 日本における講演活動 (06年~)
 - 大学生を対象としたスタディツアーの開催 (07年~)
 - アートクラフト開発プロジェクト (08年~)
 - BOPビジネス及び社会起業に関する調査 (10年)

(5) 活動のご支援について

- 郵便振替(ゆうちょ銀行)
 19470 112711 特定非営利活動法人アプカス
 (※他行からゆうちょ銀行へ振込の場合は、「ゆうちょ銀行 948支店 0011271 特定非営利活動法人アプカス」となります)
- 楽天銀行
 リズム支店 (普) 7032869
 特定非営利活動法人アプカス



参考資料: アプカス石川のフィールド報告(2004年11月~2005年2月 インド洋大津波被災地を経験して)

2004年11月 『任期の延期』

おひさしぶり。げんき??こちらは、そこそこ元気で仕事してますよ。

さて、まもなく2年間が過ぎようとしているけど、ちょっと延長が決まったので報告しておきます。来年の5月まで6ヶ月スリランカにすることになりました。いつの間にか、『ゴミ担当者』として毎日ハツリを言っています。現場の仕事に携わると、もっともっと勉強したいな~とったり、でもこれで生活していけるのか?とちょっと現実を考えたり。6ヶ月猶予期間?をもらったのでもう少し放浪します。

スリランカより

2005年12月27日 『無事です』

みなさまへ

皆さんいかがお過ごしでしょうか?

さて、ニュースでご存知の方も多いかと思いますが、インドネシア沖で起きた地震のため大規模な津波が発生しました。スリランカ時間の12月26日9時ごろ(日本の11時)一回目の津波が東海岸、南海岸を中心に発生しています。

政府発表では3000人以上死亡。50万人以上が影響を受けているということです。

クリスマス・年末休暇中と言うこともあり、多くの外国人が訪れていた地域(南、南東海岸)も被害を受けています。

まだまだ、状況が明らかになってきていません。日本人の旅行客も多数いるという情報もあります。

私のいる地域は、北中部(内陸部)であり、今回の津波の被害は全くありません。ひとまず無事と言う報告までに。ご心配頂いた方ありがとうございます。

また詳しくは情報が入り次第お送りします。

2005年1月15日 『義援金の募集開始』

アプカスの前身となる任意団体を立ち上げ、ローカル NGO への義援金の募集を開始。

2005年1月23日 『100m 圏内の住宅建設禁止?』

津波発生よりちょうど4週間が過ぎた。コロンボから南に200キロほどのタンガッラに来ている。

海岸沿いの家々がみな破壊されて、以前は道路から見えなかった海は今ではきれいに見える。海は何事もなかったように静かに波を寄せているが、被災者たちの状況はまだまだ大変である。全体的に瓦礫の撤去などは進んでいるように見える。土台だけ残った所にテントを張って避難生活をしている人も増えてきている。これは、避難所を少しずつ解消しているのも大きな背景であろう。避難所での生活にストレスを感じ、自分の『家』(土地)に戻って来ているという理由もある。被災地では積極的に学校を再開しようとしており、多くの学校が25日に始業式を考えている。多くの学校が避難所として使われており、政府としては、どこか別な避難所を作ったり、統合してりして、被災者をそちらに送る準備をしているようだ。ただ、完全に家が破壊され一時的にすら家に帰る事が難しい人も多く、我が家があった所に帰れない人は、避難

所の解消とともにさらに不便な所などへの移動を余儀なくされるであろう。政府の決定では、海から 100m 圏内は家を建てるのを禁止。すでに、ゴールなどではこの決定への抗議運動などもおきている。

非常に難しい事かもしれないが、一律の決まりを作るのではなく、地域ごとで状況ごとに決まりを作るなどの配慮が欲しい。

2005 年 1 月 24 日 『現場とは？』

私が関わりを持っている NGO では毎日のように様々な救援物資が被災地へと送られる。

この物品管理を担当しているのがキールティーさん。災害翌日から、現在に至るまで彼はオフィスに軟禁(?)状態である。

毎日のように現場から上がってくる要望をもとにリストを作り、購入担当者が検討して買ってくる。荷物を運ぶトラックを手配し、大抵夜に荷物を積み込み被災地へと届ける。

被災地で働くスタッフは当然ながら様々な要望をあげる。いくつかのサブオフィスがあるので、

それぞれの場所とのバランスなどを考えながら振り分ける必要がある様々なことに気を配り正確に物を配っていくのは相当疲れる仕事であろうと思う。

ただ、いつもスポットがあたるのは被災地の『現場』で働く人々である。先週彼と荷物の仕分けをしている時彼がボソッと「俺も現場を見たいんだけどな・・・これが俺の担当だから・・・。」といていた。

私は、少なからず、彼の気持ち分かる。「あなたがいなければ救援物資は被災者の手に届かないよ、重要な仕事だよ・・・」と彼に言った。ありきたりの言葉であったが、私の本心でもあった。裏方でがんばっている人がたくさんいる。被災地だけが『現場』ではない。支援に関係する全ての人が『現場』にいる。

2005 年 1 月 24 日 『有志で避難所に「笑い」を』

今回は我々が行なっている活動の紹介をしようと思う。

当初、我々が行なっていたのは瓦礫の撤去などの手伝いであった。その後、避難所などの情報が入ってきたり実際に避難所の様子を見に行ったりして、我々にできる事は何かと考えた時に思いついたのが『笑い』を提供する活動だった。

避難所にいる人たちにとって外国人が来ても『ものをくれる人』としか映らないかもしれないけど、我々は少しでも彼らと一緒にいる事を大切に、シンハラ語が出来る特性を活かし避難所にいる人たちの中にずっと入って行き、人々と話し一緒に笑い、少しでも辛い思い出を忘れる事を助けるような活動をする事が我々の願いである。カウンセリングなんていう大きなことは出来ないけど、なにかしたい・・・。

週末だけの活動だが、ペープサート(人形劇みたいなもの)や、歌遊び(歌を歌いながら手足を動かす)などを行い、その後、バレーボールなどの運動をすると言うのが一つのパターンである。夜フィルム上映をしたこともある。

最初は、子ども相手のプログラムを考えていたが、実際に活動を進めていくと遠巻きで見ている大人たちが多い事に気が付き、運動などに積極的に大人も巻き込むようにしている。結構無邪気にバレーボールを楽しむ大人たちを見ているとちらまで楽しくなってくる。

2005 年 1 月 28 日 『一か月がたって』

みなさんへ 阪神大震災から 10 年。あの日の朝私はいつもより早く目が覚めて何気にラジオを入れ 6 時前に地震の一報を聞きました。当然、そのニュースでは被害の大きさがつかめておらず、あのような大惨事になってるとは、その時思いもしませんでした。その後、次から次へとニュースが入ってきてその全容が明らかになっていったのです。

今回の津波災害も同じような感じでした。第一報は JICA より携帯電話に流れてきたメッセージでした。「津波が起きたから、安否確認をすると・・・」津波の事を知っている我々でさえ、何の事を言っているのかぴんときませんでした。毎年、一部の地域では海の水が増して道路が冠水するということはあるのでその事を言っているのかな？と思ったのです。ところが、外に出てみると明らかにみんなの様子が違い、何か大変な事が起きていると言う事が分かったのです。

その後、少しずつ全容が明らかになってきました。さて、阪神大震災の被災地は 10 年間でどのように復興したのか？その事について全く知らない私ですが、一つ気になるのは「忘れ去られた人」がいなかったのかという事です。「弱い立場の人」が切り捨てられるような事がなかったのか？そのような対策があったのか？いま、スリランカの現場を見ながらそんな事を考えていました。

被災地に行っていると救援物資を配っている場面に出くわす事がありますが、本当に、疲れきっている人は物資を運ぶ車が入れるところまで取りに来られるのか？物資が来る事を知っているのか？と疑問に感じることも多々あります。平等に支援するのは難しいけれど、せめて救援物資が被災者同士の争いの種や、自立 心・自尊心を壊すきっかけとならないよう願います。

2005 年 1 月 29 日 『津波のあった一日』

確か報告していなかったかと思うが、津波が起きた当時私も南西海岸沿いにいた。10 時前だったろうか、周りの人が騒がしくなってきたので何かおかしいなと思い、近くにいたスリランカ人にどうしたのかと尋ねた。その人は、当然『津波』なんて言葉を知らないで「海が来るらしい！」という返答をした。私は意味がよく分からなかったが、その直後に JICA から携帯電話にきた『津波発生。安否確認をする』のメッセージで、状況がわかった。しかしその時、スリランカ全土が津波に襲われている事なんて思いもしなかった・・・。ゴール道路(南西海岸沿いを走る主要道路)をコロンボの方へと歩いた。海から 2、3 百メートルは離れているゴール道路わきにも水が来ていた。大きなリゾートホテルにいたと思われる外国人が何人も道路へと逃げてきていた。水着のままの人もいれば、アーユルベダの治療を受けていたのかバスタオルだけの人たちもいる。はだしの人も多く、逃げる際怪我したのか出血している人もいた。

その中の一人が親切に、「どうせバスも無いからしばらく我が家で休んでいきな」というので、彼の家に行った。その日は快晴であり本当に暑かった。その家で休ませてもらえたのは本当にラッキーだったと思う。停電。電話もダウン。いまち周りの状況がつかめない。1 時間でも待てばバスも動き出すだろうと思っていたのが甘かった・・・。そこから、なんと約 6 時間も彼の家にお世話になってしまった。バスが動かないどころか、ゴール道路が破壊されており、コロンボへ向かうのは不可能だろうという情報が入ってきた。周辺住民も小高い所へと避難をしはじめていると近所の家の人から伝えられた。また、「海がくるらしい！」「今度はもっと大きいのが来るらしい・・・」住民の不安は募るばかりである。正確な情報ではない様々な情報が錯綜する。かろうじてつながっていた携帯電話で色々情報を集めてみると、内陸部の道路には問題が無く、多分コロンボまで行く事が可能であろうと言う事になった。すでに 17 時を過ぎており、帰るならいましかないかと判断をした。スリランカ人は心配をしてくれて、「我が家に泊まって明日帰ればいいよ」と何度も言ってくれた。彼らの車で近くの大きな街まで送ってもらった。その間、道路に打ち上げられた漁船などがあつた。街の中は閑散としており、数台のスリーウィーラー(三輪車)が

あるのみ。普段、人でごったがえしているバス停にはバスも人も全くいない。スリーウィーラーと交渉をして内陸部の街まで行く事にした。その後、かなりバスのダイヤが乱れていたが何とか最終便に間に合い、22時過ぎにコロンボへと到着した。普段であれば1時間半で行く所なのだが、車、スリーウィーラー、バス2台を乗り継いで5時間以上かかった。とにかく、無事にコロンボへ着いたことにほっとしていた。そして、運がよかったなと・・・。

25日は海で遊んでいた。もし、津波が一日早く来ていたら、巻き込まれた可能性が高い。26日はコロンボへ帰る準備をしていたので、荷物もまとめて海にも行かずにいた。もし、帰る前にひと泳ぎと海に行っていたら・・・。『もし』という言葉を使ったら切がないのだが、本当に運が良かった。運良く助かったのだから、何かをしたいと言う思いが今の活動の原動力の一つかもしれない。まだまだ私の中での優先事項は「津波被災者支援」である。

2005年1月30日 『予防』

何人かのスリランカ人から、「お前は環境の事を教えているのに何で津波の事を教えてくれなかったんだ・・・？」という質問を受けた。正直言って答えに困ったが、「もし、教えても信じなかったでしょう？」とちょっとふざけた答えをしてその場を切り抜けていた。

正直、スリランカ人に津波の話をしてほとんどの人が信じなかったと思う。200年近く前に一度津波があった記録があるそうだが、現在いる人々の記憶には当然無い。

ネットの記事でインドネシアのある島では、「海の水が引いたら波が来るということだから山に逃げろ」という言い伝えがあり、津波に襲われたにも関わらずほとんどの人が助かった。とあった。スリランカでは海の水が引いたあと、多くの人々が珍しい現象を見に海へと行っている。魚をつかまえに行った人も多かった。そんなひとの多くがその後来た大津波に襲われた・・・。もし、津波が来るという情報がちゃんと流されていたとしても、その経験をした事がない人にとっては、「ばかげた話」の一つとして片付けられてしまったのではないだろうか？

今回の大災害では、「予防」の難しさと「予防」の大切さを本当に考えさせられる。「予防」は「治療」より重要な事である。とよく言われるが、「予防」は地道な活動なしでは成功しないものである。道路や橋を建設するのも大切なのだろうが、「評価」を出す事が難しい「予防活動」にもっと力を入れる必要がある。

どの分野においてもその事は言えるのではないだろうか？

先週、南のある街で津波が来るという噂に街中がパニックになった。

午前中で、多くの子どもは学校へ行っていた。親達が子どもの安全を心配して一斉に学校へ行った。

街の中には主要道路が走っており交通量も多い。そんな中、交通事故で二人の命が亡くなった・・・。

津波が来るというのはただの噂で結局何もなかった。

2005年2月8日 『配慮』

多くの学校が再開している。避難所として使われている学校はまだ多くあるが、一時的に他の学校へ生徒を送っている。完全に破壊された学校の建設はまだ始まっていないが、仮設の学校・一時的な統合で対応するようである。学用品、制服、靴など全てを失った子ども達が多数いるが、その支援もスムーズに行なわれているとはいえない状況だ。私が行った多くの避難所で聞かされたのが「学校へ行く靴がない」「ノートがないから学校へ行けない」等である。被災後一ヶ月半もの時が過ぎているのにまだまだ末端の状況は変わらないままだ。教育省は子ども達を通して被災状況の情報を集めようとしているらしい。学校単位でそのような情報を集める事は今後の支援活動を考えると非常に重要なことかもしれない。し

かし、その情報の集め方に問題があるようだ。NGO のスタッフが、学用品の不足状況を調べにある学校へ行った時の事を話してくれた。その地域では比較的被害も大きく、両親を亡くしたり、兄弟を亡くした子ども達が多数いた。当然、どの子の親が亡くなっているかなどは分からない。その情報を集めると上からの命令を受けた先生は、子ども達を集め、「お父さん、お母さんがいない子はこっち！」「お父さんだけいない子はこっち！」「お母さんがいない子はこっち！」……。と言ったそうだ。全く信じられない事である。普通の人でもそんな言い方はしないと思うが、教育者がそんな事を言おうとは……。要するに、簡単に情報を集めるやり方を先生達は選択したのであろう。子どもへの配慮のかけらもない。NGO スタッフの話では、子ども達は平然と先生の言う事にしたがって動き特に泣き出ししたりする子はいなかったらしい。ただ、確実に子どもの心の中を乱した事であろう。そして、周りの子どもから「あの子のはお父さんも、お母さんもないんだよ」と差別的に見られる可能性もある。全ての事に通じて思う事、『もう少し考えて欲しい被災者の立場になって』と……。

2005 年 2 月 10 日 『2 次的被災者は？』

朝 5 時半に出発、南部の都市マータラ・ハンバントタを目指した。道路は一部未舗装部分があるが、走行が難しい道はなかった。まず、マータラにある NGO のオフィスに頼まれていた荷物を届け、何人かと話をした。現在は「緊急支援」という事で、食料や日用品などの物資を提供しているのだが、これにはきりが無いとのこと。被災者がそうでないかの区別も難しく（行政がしっかり動いていればそれほど難しい事ではないのだが）本当に、必要な人の手元に届く前に支援物資が終わってしまう危険性があると彼らは指摘していた。

今後その NGO は、本当に被害を受けて立ち直る事が難しい人々を選び、彼らが自立するまでの長い支援を計画中の事だった。「緊急支援」から「復興支援」へと、どこで移行させるのが非常に大きな課題である。10 時過ぎにマータラを離れハンバントタへと向かった。被災地での瓦礫の撤去等も進んでいるようだ。ハンバントタは人口約 1 万人。津波でやく 4500 人死亡と伝えられているので、外部から来ていた人を計算に入れて考えても、人口の約 1/3 が亡くなったことになる。当然、いまだ街の中はひっそりとしており、ひらいている店もほとんどない。海沿いにあった市場が 26 日にひらかれておりそこに人が集中していたのが死者数が増加した原因である。隣の村で休憩に立ち寄った際、そこのおばちゃんが少し話を聞かせてくれた。「26 日の朝、私も市場に行っていたんだよ。一回目の波が来て私は怖くなって山に向かって逃げたけど、多くの人が海の水が引いていくのを見に行ったんだ。そして、直後に来た 2 回目の波にたくさんの人がさらわれたんだね……。向かいの家の家族もあの日みんな市場に来ていたんだよ。誰も帰ってこなかった……。ほら、あの家……」と、ひっそりとたたずむ家を指差して教えてくれた。7 人家族がいた家は、今は空き家となっていた。

NGO の報告によると、この地域で両親を亡くした子どもは 21 人。5 人の子どもだけが取り残された家族もあった。現在、子ども達（おとなも）の多くが親戚などの家に頼って生活をしている。今の段階では、多方面から援助も入ってくるし、気持ち（かわいそうだと言う）も強くあるので、何とかみんなが寄り添って生きている。ただ、今後支援が減っていったりすると、被災していない人たちも生活が苦しいので、被災者を『追い出す』（言葉が悪いかもしれないが）という事が広まってくるのではという事だった。また、直接被災をしてなくとも、被災地で仕事をしていた人や、下請けなどの仕事をしていた人たちも、仕事を失い、お金もなく困っている。2 次的被災者への支援は現在行なわれていない。

2005年2月25日 『援助依存症候群』

被災地の状況は刻一刻と変化している。ゴールロード(南西海岸を走るメインの道路)沿いの景色も明らかに変わってきた。以前は、ただ瓦礫の山であったが、少しずつ瓦礫は片付けられ、その場所にテントを張る人が増えてきた。また小さな掘っ立て小屋も増えているようにみえた。この掘っ立て小屋は不思議な事にとっても小さく当然寝る事なんて出来ない、一畳分もあるか分からない掘っ立て小屋を何故人々は作るのか？少し考えないと答えが出なかった…。掘っ立て小屋には細長い椅子がありそこに何人かの人が座っている。車が少し速度を落とそうものなら、すかさずそばによって来る。要するに掘っ立て小屋は、『救援物資』が来ないかどうかの『見張り台』であったのだ。

マータラ(コロポボから160キロ南の街)を訪れて NGO のスタッフと少し話をした。臨時のオフィスという事で、出してくれた紅茶もプラスチックのカップに入っている。しょうが入りの紅茶を飲みながらスタッフの話に耳を傾けた。その時3人のスタッフがいたのだが、みんなが次から次へと話をしてくる。時には3人が同時に話をする。この短期間の間に彼らは本当に様々な事を見聞きし、感じて、それを誰かに伝えたいと言う思いが非常に感じられる。当然私には語学の壁があるため、彼らの言っている言葉を全て理解するのは難しいが、残りの部分は感覚で感じ取るしかない。普段であれば、「その単語の意味は何？」という質問をするのだが、彼らがあまりにも懸命に話すのでその迫力に押されてその質問は出来ないのが現状である。

そんな話の中で、本当に驚く事を聞いた。ある被災地域に行ったとき、被災者の一人が彼らにあびせた言葉が「ある物おいて帰れ！」であったそうだ。はじめ私は自分の耳を疑った。再度聞きなおしても同じ言葉であった。

帰り我々の前を一台のワゴンが走っていた。時折彼らの車の窓から何かが投げられているのに気がついた。投げているものは小さなノート。子ども達を見つけてはそのノートを窓から投げているのである。時には車の速度を落とし、近くにいる子どもたちにノートを見せて子どもを集めたからノートを投げる。子どもたちにノートが必要か現段階では必要なのか全く聞く事もなく、一方的に与えているのである。「動物に餌をやっているのではない…。」

3つばかり例を出させてもらったが、援助する方、される方双方に問題があるのであろう。現場にほとんど行かない私にもこれだけの事が見えてくるのだから、実際の現場ではこれよりはるかに多い『事実』があるのであろう…。『援助依存症候群』に陥ったら一体どうやって復興なんてするのだろうか？

我々の支援が『援助依存症候群』患者を増やしているとしたら、我々はどうすべきなのか？『援助中毒』になる前に何とか手を打たなくてはならない。